



10月30日(水)、教職員全体研修で「哲学的思考を鍛える」というテーマで、研修を行いました。

講師には、大阪哲学学校 (<https://oisp.jimdo.com/>) の 田畑稔さん 平等文博さん 木村倫幸さん (3名の詳しい経歴は「教員哲学研修について」のページをご覧ください) をお迎えし、ご講演いただきました。

以下、研修内容です。

○目次

- (1) 「哲学」という言葉と、哲学の略史
- (2) 「生きる場の哲学」の系譜
- (3) 4つの「知」について
- (4) 哲学的思考を鍛える(「哲学的に考える」とは「どう考えることか」)
- (5) 「道徳教育」を「哲学的に考える」

(1) 哲学という言葉と、哲学の略史

まずは、「哲学」という言葉についてです。ギリシャ語では「愛する」を「philo」、「知恵」を「sophia」といい、ギリシャのピタゴラスが「真に知恵を持つのは神のみで、私は『知恵を愛求する者』』だと言ったことが始まりで、日本では西周(にしあまね)が「哲学」と造語し日本語訳として定着したというお話でした。

続いて、哲学の略史です。古代ギリシャから始まり、近代西洋哲学17世紀、18世紀、19世紀に入って現代思想の源流から現代哲学、という流れを代表的な哲学者の顔写真と名前を示しながら、ご説明くださいました。



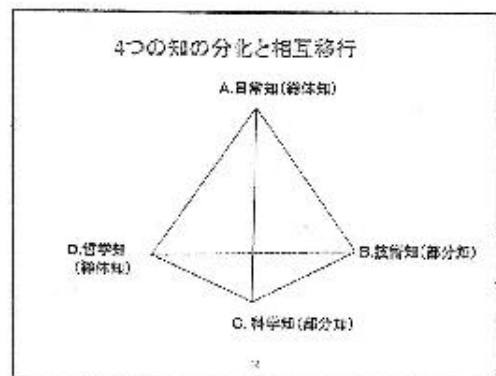
(2) 「生きる場の哲学」の系譜

次に「生きる場の哲学」のお話でした。ソクラテス、カント、クローチェ、グラムシと、お話しされました。中でも印象に残っているのが生活者を全員哲学者としてみる事例として、「ことわざ」を挙げられた点です。

例えば、「木を見て森を見ず」は「広い文脈の中でしか個別事象の『意味』は理解できない」や、「人は見かけによらぬもの」は「『見かけ』に囚われず、『本質的なもの』『構造的なもの』をとらえる努力をせよ」など、生きる場に哲学が根付いている事を、示されました。

(3) 4つの「知」について

次に、4つの「知」について説明されました。A「日常知(総体知)」B「技術知(部分知)」C「科学知(部分知)」D「哲学知(総体知)」のそれぞれが互いに移行していくことと、どれかが突出しているのではなく、バランスが大事というお話でした。



(4) 哲学的思考を鍛える(「哲学的に考える」とは「どう考えることか」)

「哲学的思考を鍛える」ために、以下の6点を示されました。

① **概念的思考** イメージで済まさず「～とは」で考える思考

学校「とは」、道徳「とは」、人生「とは」…と、意味を限定(定義)し、指示する対象を限定し、その多様な形態を丁寧にいくつも挙げ、挙げられたものを系統立てて関連付けを行なったりすること。

② **批判的思考** 内在し対話しつつ腑分けする思考

まずは当の意識や当の事象の中に入り、対話しつつ、例えば肯定面と否定面、真と偽、善と悪、堅持すべきものと克服すべきもの…などを腑分けすること。

③ **相対的思考** 「虫の目」と「鳥の目」を両方鍛える思考

細部、専門、一側面、個別事象だけに埋没しないで、「大きな文脈」の中で「意味」を理解する必要があるが、生活世界の中で這いつくばって必死に生きる「虫の目」を失うと「鳥の目」は宙に浮いてしまうので、両方を鍛える必要があるということ。

④ **原理思考** 確かな足場を鍛える思考

確かな足場を鍛えておいて、そこから具体的状況に対処する。事態は次々変化するが、そこから不変のもの、構造的なもの、法則的なものを把握しようとする。具体的な対処の方法などはその時々が変わるが、自分の基本的な認識、価値、スタイルは一貫すること。

⑤ **反省的思考** 考えている自分を考える思考

自分の中の他者、あるいは自分を客観的に見る自分と、対話してみること。その際には、思考の枠組みであるカテゴリー(量、質、原因、結果、可能性、現実性…など)を使ってみる。

⑥ **解放論的思考** 「解放論的想像力」とその実現の諸条件を実践しつつ練り上げる思考

差別や貧困や抑圧は現実であり、未来を目指す「解放論的構想力」が消滅することはない。存在の危機から発せられる声は、最初から洗礼された声として登場することなどありえないから、実践しつつ練り上げていく必要があるということ。

(5) 「道徳教育」を「哲学的に考える」

そして、最後に「道徳教育」を哲学的に捉えたときの考えが、示されました。

以上が、簡単ではありませんが、講演の内容となります。この講演を受け、特に「(4) 哲学的思考を鍛える(「哲学的に考える」とは「どう考えることか」)」で示されました6つの思考を職員が常に目にする所に張り出し、日々の学校での様々なことの基本にしていくことが、職員全体で確認されました。特に、授業づくりには必ずこの思考を取り入れていくこととなりました。

これまで哲学に詳しく触れてこなかった人にも分かりやすく、ご講演くださいました。3名の講師の皆様、本当にありがとうございました。

(文責:松浦)